

住み慣れた街でいきいきと

(福)幸会

大野南地域包括支援センター

主任介護支援専門員

矢島 友子



今年4月に地域包括支援センターに配属になり7ヶ月が過ぎました。制度改正の混乱の中、新予防給付がスタートし、包括支援センターでケアプランの作成が始まりました。

「認定結果によってケアプランの作成担当者が変わる、サービスの負担が月額料金になる」など、制度上の決まりごとには、なかなか説明に苦労しました。また、目標を設定し評価をしていくという点では、自立支援の考え方がより明確になったのではないのでしょうか。

テレビが友達という一人暮らしの方に「毎日テレビ体操をする」というプランを組み入れました。1ヶ月して訪問すると「やっていますよ、体操」と、にこやかに迎えてくださいました。一緒に考えて決めたことを実践し誇らしげに報告する姿に思わず嬉しくなりました。

誰もが健康で元気に暮らしたいと思っています。また、誰かのために、何かの役に立つ人生を送りたいと願っています。

地域包括支援センターにできることはどれだけあるのか、まだまだこれからですが「この地域に住んで良かった」と言ってもらえるようなセンターを作りたいと思います。

福祉の原点

このネットワークを踏まえて、「官」と「民」が協力をして新しい福祉のシステムをつくりあげようというのが私たちにとっての大きな課題だと思えます。「ともしび運動」は、福祉の心を地域に広げる運動であり、地域の心をつくりあげていく運動ではないでしょうか。今はこの運動を県社協が中心になって展開し、広げていこうとしています。三十年経ち、新しい段階を迎え、課題にどう取り組んでいくかを問われていると、私は理解をしております。

子どもお年寄りも外国人も障害者も、みんな人生の旅をする仲間ではないか、その仲間同士が親しく手を結びよりよい社会をつくらうではないか、と呼びかけたのです。一本のともしびでどれだけ世が明るくなるのか、何の役に立つのかと思えますが、それは、まことに小さなさやかな営みです。

今日の福祉は「自立支援」と言われます。自分の責任で立ち上がり、きちんと生活して人生の最期まで皆で手を添えようというものです。これをサポートといいます。

サポートは上から下へ施しをするのではなくて、下働きです。人の役に立つ。それが自立支援の意味で

す。福祉というのは、下から上に運びあげるといって、そういう新しい努力をしていかななくてはなりません。それはただの一燈から始まるのです。

長洲知事はよくマザーテレサの話をされました。インドで死に行く人々の介護をする話ですが、テレサが外国の新聞記者から質問されました。「世界で何千万という、困った人がいます。この地域のおこないにどんな意味があるのか」と。彼女は「私の成しうることは一滴の雫かも知れない。でもそれが、万の雫になった時にはどれほどのものになるか」と答えました。それはまた、自分自身も照らしだされるのです。

ともしびが始まった頃、古くさいと言われました。でも、ともしび運動には、それだけの思想があり、真理があったことを、この三十年を振り返ると思わずにはいられません。それこそ福祉の原点だからです。

「二燈をかかげ、暗夜を行く」「ただ、一燈を頼め」。これは佐藤一斎の言葉です。

一燈を自分から掲げる勇氣を持ち、それを隣に渡し、広げていくことに私たちは確信を持つようではありませんか。

(企画調整・情報提供担当)
※本頁は、阿部志郎氏の講演内容の一部を編集して掲載しています。予めご了承ください。